

2025年3月1日発行 通巻第321号

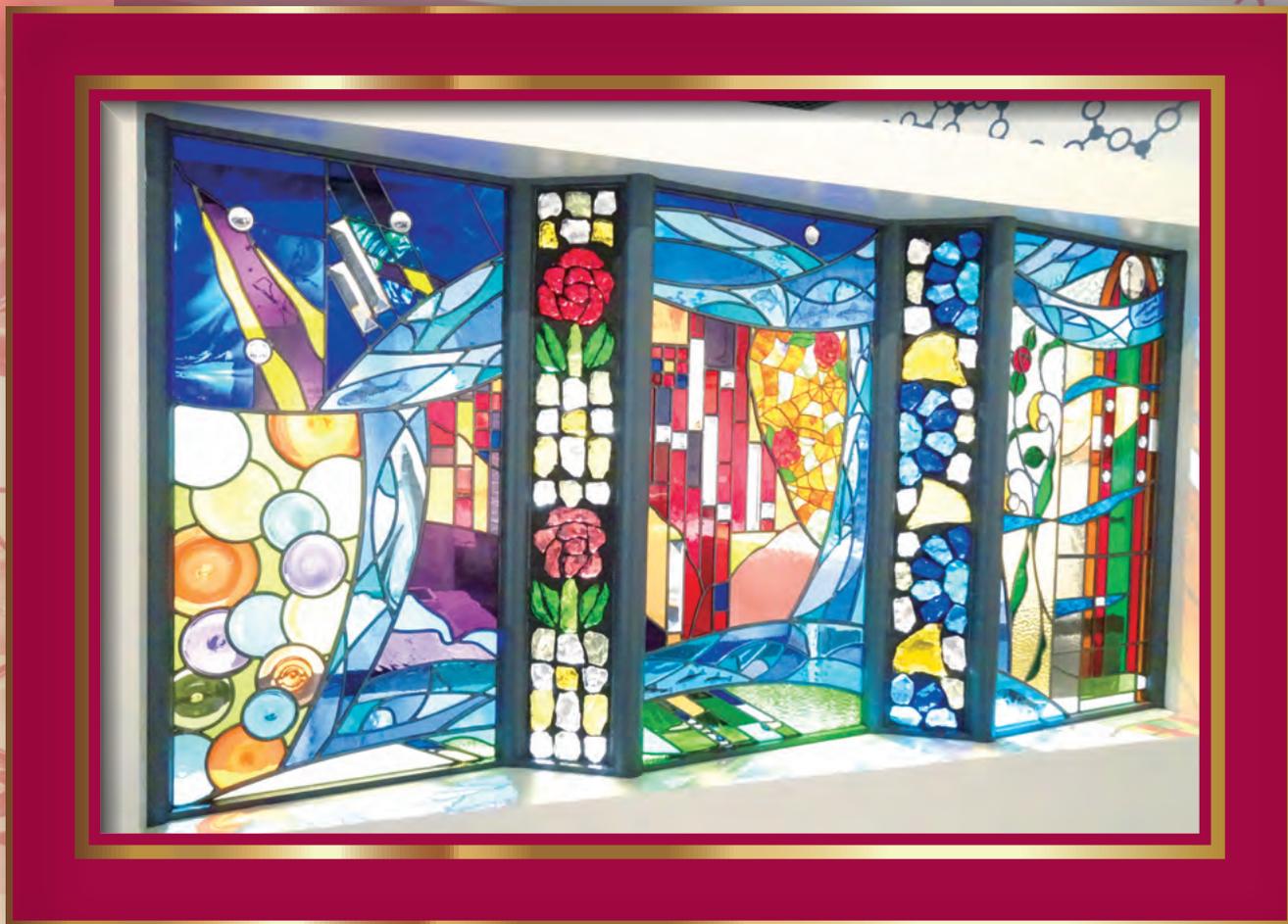
全科協

vol.55
NO.2

News

CONTENTS

- P2 特集
- P10 海外博物館事情
- P12 3月4月の特別展等
- P14 リニューアル情報
- P15 新規加盟館紹介
- P16 トピックス



表紙の写真の解説は、P16の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

特集 Special

ミュージアムキャラクターのすゝめ

JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718
東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9171
<https://jcsm.jp/>

ミュージアムキャラクターのすゝめ

皆さんの館にミュージアムキャラクターはいるだろうか？

一口にミュージアムキャラクターと言っても誕生に至るまでの経緯は施設によって様々であろう。館職員が自ら生み出したものから、デザイナーが考案したもの、イメージキャラクターとしてデザインを公募したものなどもあり、館専属でなくとも自治体や地域のキャラクターが兼任していたり、時には期間限定の企画展のキャラクターが施設の公式マスコットに昇格したりという話も耳にする。生い立ちが多様ならばその活動も幅広く、館のイメージを示すロゴマークの延長としての役割はもとより、展示パネルや館内表示での館の代弁者として、組織間の連携・協力関係の象徴として、オフィシャルグッズのモチーフとして、さらにはキャラクター自身が来館者と触れ合うイベントの主演となることもあるなど、ミュージアムという業態との親和性はとても高い。

周知のように例年ミュージアムキャラクターの人気投票をする大会も開催されており、毎年各キャラクターの応援コメント欄には推しキャラと共にそのミュージアムも応援しようという人々の熱気で溢れている。

館のマスコットとなるキャラクターは、施設にとって必須なものではないものの、うまく活躍すればそのミュージアムにとって心強い相棒になり得る可能性を秘めている。今号では佐賀県立宇宙科学館、岩手県立博物館、明石市立天文科学館の3つの館のキャラクターの誕生秘話やその活動内容、キャラクター運営に必要なことなど、普段知ることのできない舞台裏もご紹介いただく。さらに、2010年から続く「ミュージアムキャラクターアワード」の運営事務局として普及に寄与してきたインターネットミュージアム事務局には、大会の開催理念や長年多くのキャラクターに関わってきて得られた知見をご報告いただく。これらの事例が、既に活動しているキャラクター達の活躍の場を広げる一助に、また、新たなミュージアムキャラクターが生まれる後押しになれば幸いである。

熊本博物館 学芸員 南部 靖幸

キャラクターが導くミュージアムの広報 — ミュージアムキャラクターアワードの意義と展望

アイエム編集長
古川 幹夫

「どんぐりが好きで青い勾玉のような顔が特徴の1830歳」「雷神に切りかかるというやんちゃで無鉄砲な男の子」「篆刻をこよなく愛する付喪神」。一見すると童話やアニメの登場人物のように思えるかもしれないが、これらはそれぞれ、ミュージアムと深い関係がある。

正解は、いずれも「ミュージアムキャラクターアワード」でグランプリを受賞したキャラクターたち。具体的には、出雲弥生の森博物館の「よすみちゃん」(2011年)、立花家史料館の「雷切丸くん」(2018年)、篆刻美術館の「刻狸(こくり)」(2023年)。彼らはオンライン投票を通じて多くのファンの支持を得て、ミュージアムの広報活動に大きく貢献した存在である。

日本最大級のミュージアム情報サイト「アイエム」

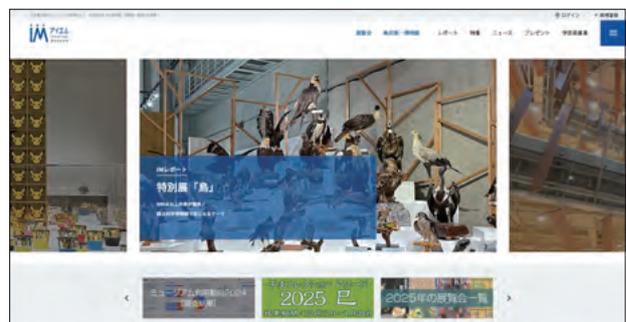
「ミュージアムキャラクターアワード」を主催しているのは、日本最大級のミュージアム情報サイト「アイエム」である。アイエムは「インターネットミュージアム (Internet Museum)」の頭文字である「I」と「M」から名付けられたサイトで、1996年に株式会社丹青社によって開設。当時は日本におけるインターネットの黎明期で、すでに30年近い運営実績がある老舗サイトでもある。

サイトの運営コンセプトは「Life with Museum (ミュージアムのある暮らし)」。日本全国の美術館、博物館、科学館、資料館などの情報を広く発信し、ミュージアム文化を社会に根付かせることを目指している。

ミュージアム業界が抱える課題の一つに、「ミュージアムに興味を持たない層へのアプローチ」がある。ミュージアムは

その性質上、敷居が高く感じる人も多く、普段足を運ばない人々にどうやって興味を持ってもらうかは、多くの施設が抱える共通の悩みであるといえよう。

その中でアイエムは、全国のミュージアムが独自に作成しているマスコットキャラクターに注目。これらのキャラクターを活用し、気軽に参加できるオンライン投票形式のイベントを通じて、ミュージアムの魅力を広く知ってもらおうと考えたのが「ミュージアムキャラクターアワード」の始まりであった。この企画は2010年にスタートし、以来毎年開催される恒例のイベントになっている。



「アイエム」トップページ

「ミュージアムキャラクターアワード」の概要

ミュージアムキャラクターアワードは、毎年夏休み期間中の45日間にわたって実施されている。参加できるのは、館の公式マスコットキャラクターや教育普及プログラム用のキャ

ラクターなど。公式サイトでのイラスト展開に留まっているものから、着ぐるみまで用意して情報発信に活用しているものまでであるが、「ミュージアムで愛されているキャラクター」を広く認めることで、ミュージアム側が気軽に参加できる仕組みを整えている。

一度グランプリを獲得したキャラクターが再びエントリーすることはできないが、2位以下のキャラクターは翌年以降も挑戦が可能。そのため、近年では何度もエントリーを重ねた末にグランプリを獲得するキャラクターが増えている。



「ミュージアムキャラクターアワード 2024」

ミュージアムキャラクターの多様性

ミュージアムのキャラクターをみると、ミュージアムの所蔵品や地域の特産品、地名、言葉遊びなどから着想したものなどがある。そのデザインも、プロのイラストレーターが手がけたものから、ミュージアムのスタッフが自作したものまで多種多様である。

キャラクターの姿かたちも、小動物などの可愛いものから、宇宙人、老人、謎の生物など、実に多彩。ただ、アワードで上位に入っているキャラクターをみると、それらのデザイン性よりも、スタッフの思いが強く反映されているキャラクターが人気を集めているのは特徴的でもある。

アワードの進化と影響

「ミュージアムキャラクターアワード」は、2010年の初回開催から着実に規模と影響力を拡大している。初回には37キャラクターが参加し、総投票数は16,107票、首位の高岡市立博物館「利長くん」は2,025票を獲得した。しかし、直近の2024年を見ると、参加キャラクターは62体に増加し、総投票数は150,576票と、初回の約9倍にまで拡大。首位となった利府町郷土資料館「あさガオー・みヤギー」は24,769票を集め、競争の激化を示している。

SNSの普及による拡散効果

ミュージアムキャラクターアワードが成長した背景には、スマートフォンやSNSの普及がある。特に、X（旧Twitter）などのSNSを活用した情報拡散は、参加ミュージアムにとって大きな武器となっており、たとえば、ミュージアムのある地域のインフルエンサーが投票を呼びかけると、その情報がネット上で爆発的に広がり、地元以外の層からも票を集める結果に。また、SNSを使ったキャラクターの日常の発信や、投票期間中のイベント情報の共有なども、関心を引きつける要因となっている。

SNSの効果は特に若い世代を巻き込む点で顕著であり、ミュージアムがこれまで接点を持ちにくかった層にアプローチする手段としても、大きな可能性を秘めている。

マスメディアによる注目

回を重ねるにつれ、ミュージアムキャラクターアワードは、新聞やテレビなどマスメディアからも注目を集める存在になっている。これらの報道は、ミュージアムの広報活動を強化するだけでなく、地域の文化資産や地域の魅力を広く発信する機会としても重要で、アワード期間中に地元紙が取り上げたことで投票数が急増した事例や、テレビ番組でキャラクターが紹介されて認知度が大きく向上したケースも見られている。

ミュージアムキャラクターアワードで首位を獲得すると、アイエムから表彰盾が授与されるため、その受賞式の模様が報道されることで、表彰されたミュージアムやキャラクターが改めて注目されるだけでなく、参加した他のミュージアムにも波及効果が及び、ミュージアム全体の価値向上にもつながっている。



「ミュージアムキャラクターアワード 2023」グランプリを記念した特設ページ「篆刻美術館をたずねて」

地域コミュニティと新たなつながり

またミュージアムキャラクターアワードを通じて、地域コミュニティの結束が高まるという副次的な効果も見られている。投票の呼びかけが地域の商店街や学校、自治体などを巻き込む形で進められた結果、地元住民がキャラクターを応援

する一体感が生まれたという声は多く寄せられており、この動きは、ミュージアムが地域文化の拠点として新たな役割を果たす可能性を示唆している。

また、上位にランクインしたミュージアム同士が連携して交流が生まれるなど、ミュージアム間の新たなネットワーク形成も進んでいる。このようなつながりは、単なる広報活動を超え、文化施設同士が協力して地域文化を盛り上げる基盤にもなりつつある。

ミュージアムスタッフの結束とモチベーション向上

投票期間中、参加ミュージアムのスタッフが丸となって票を積み上げる過程で、チームの結束が強まるという意外な効果も確認されている。特に小規模なミュージアムでは、スタッフ全員が日々投票を呼びかけるなど、広報活動に全力を注ぐこととなり、この共同作業を通じて、スタッフ同士の連帯感や達成感が高まり、ミュージアム全体の士気向上につながっているという報告が寄せられている。

ミュージアムキャラクターアワードの今後と可能性

前述したように人気の高まりを受けて、近年ではミュージアムキャラクターアワードでグランプリを獲得するのは、かなり難易度が高いといえるが、参加そのものがミュージアムにとって大きな広報効果をもたらすことは明白でもある。特に、新たな層との接点を生み出す機会や、SNS・メディアでの注目を得る場として、アワードの価値はさらに高まっているといえよう。

キャラクターさえ設定していれば、ミュージアムキャラクターアワードへの参加は無料。2025年も7月初旬にエントリーの受付が始まる予定であり、これまで参加をためらっていたミュージアムにも、新たな広がりを期待したい。

アイエム「ミュージアムキャラクターアワード」

<https://www.museum.or.jp/museum-chara/>

みんなを笑顔にする「ウーたん」 地域と交流する広報の一員

佐賀県立宇宙科学館
広報営業グループ 山田 幸徳

みるみるうちにできる人だかり。その中心にいるのは黄色いキャラクター。館内で流れるテーマソング「ゆめぎんがウーたん♪」に合わせて体を左右に振りながら愛嬌を振りまく。「あっ、ウーたんだ。かわいい」。子どもたちが駆け寄り抱きつく。たちまち写真撮影の行列ができ、館内がにぎやかになる。

「ウーたん」の本名は佐賀県立宇宙科学館の愛称を冠した「ゆめぎんが★ウーたん」。科学館と同じ7月7日生まれ。小惑星ゆめぎんがからやってきた。頭からしっぽまで背中に太陽系の惑星が並ぶ。赤い太陽に水星、地球は青く、土星の環も細かく表現している。好きなものは佐賀の豊かな自然・おいしい食べもの、プラネタリアム、コンペイトウ。そしてキラキラ輝く夢が大好き。角でみんなの夢をキャッチしてポシュットへ。夢がたくさん集まったらコンペイトウに変わる。嬉しくなると、しっぽを左右に振って辺りに星をまき散らす。

なんとも細かいところまでのキャラクター設定はウーたんが誕生するまでの経緯が物語っており、スタッフのいろんなアイデアの結晶だ。

ウーたんの出生の秘密は誕生から6年さかのぼる。2009年に開館10周年を迎えた宇宙科学館は記念事業として、小惑星番号12746に愛称の「ゆめぎんが」と名付けた。この小惑星は小惑星ハンターとして有名な渡辺和郎さんが1992年に北海道北見市で発見、太陽からおよそ2天文単位離れた軌道を公転周期3.3482年で回る。この年、国際天文学連盟に正式に名称として採用された。



プラネタリアム番組内にご当地キャラクターを登場させる企画が持ち上がったのをきっかけに、2015年、宇宙科学館のオリジナルキャラクター制作の検討が始まった。ゆるキャラか、どんな場面に使うか、などコンセプトを明確にした上で、キャラクターを設定することを原則に、デザインは外注、公募、館内コンペのどれにするか。年の初めから構想が膨らんだ。

1月13日、第1回会議。星、プラネタリアム、星を吐き出す怪獣、宇宙人、妖精などのイメージが寄せられた。①しゃべらないゆるキャラ②2.5～3頭身③幼稚になりすぎない程度にかわいく④手、足、目、口をつける⑤塗り絵でも使えるようシンプルな線⑥黄色——などをコンセプトに、館内のスタッフでデザインコンペすることが決まった。1カ月後、恐竜やロボットのイメージ、科学館らしいものから有明海の特産でエイリアンそっくりとも言われるワラスポまで27点の作品が寄せられた。1次選考の上位5点でスタッフによる決選投票。着ぐるみにした際に使い勝手はいいか、ほかのキャラクターとかぶらないかなどを踏まえ、3月に最終決定した。最終選考に残った作品の捨てがたいところを1位の作品に取り入れてブラッシュアップ。そうして誕生したのが「ゆめぎんが★ウーたん」だった。

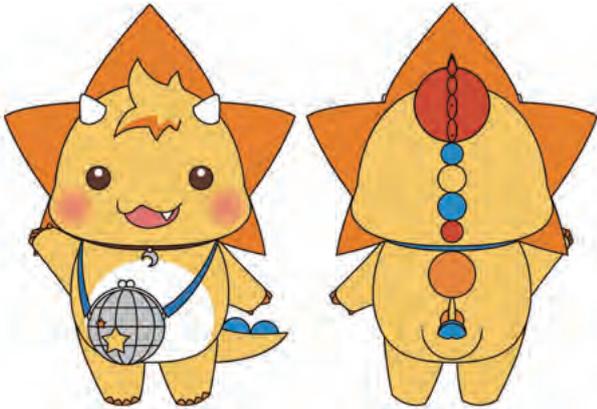
1位に選ばれたデザイン案を考えたのは経営管理グループのショップスタッフ。星、月、太陽と惑星をイメージし、総合科学館なので、宇宙だけでなく宇宙以外のモチーフを取り入れたく、ベースは恐竜にした。惑星を背びれにするアイデアは他のスタッフのアイデアを盛り込んだ。背びれは当初、単純な三角形のギザギザだったが、顔回りにある星型フリルのとんがりとけんかをしそうだった。丸い惑星を取り入れたことで特徴的で素敵なデザインになった。

建物の特徴であるプラネタリアムはポシュットとして取り入れた。体となじむように黄色とオレンジの星を散らし、ストラップは背びれにも使っている青でアクセントにしつつ全体の統一感を損なわないように。月チャームが揺れる濃い茶

色のチョーカーを着け、面積の広い黄色とオレンジの体を引き締めるようにした。「強そう」「怖い」という印象にならないよう、角や爪は小さめで先端を丸め、角が短すぎて丸いと動物の耳のように見えるため、程よく、柔らかく見えるような形を目指した。角の間にはふさふさした毛束を置いて、もふもふ感を加え、1本だけ八重歯のように生えた牙がチャームポイント。



デザインの意図をとうとうと語る生みの親のスタッフの話から、細部にまで意識を注いで作り出したキャラクターへの思いの強さが伝わってくる。



混雑する館内でウーたんが現れると人の流れが変わる。混雑が分散されるとともに、来館者の表情がみるみるうちになごみ、場の雰囲気をやわらげてくれる。引きも切らない写真待ちの列に、ウーたんのぬいぐるみを抱いて来る子どももいて、着ぐるみとスリーショットなどほほえましい光景が広がる。

ウーたんの人気はミュージアムショップのグッズ販売との相乗効果も生んでいる。キャラクター制作の当初からグッズ制作を想定しており、キャラクター入りのペンとクリアファイルを作成し販売した。そのうち「ぬいぐるみはないの」という声が寄せられた。タイミングよく人気キャラクターを手掛けるぬいぐるみ製造会社が営業に来られたことで、ウーたんぬいぐるみの試作が始まった。

「どんなのができるか不安だった」というスタッフの心配をよそに、「満点の出来」のぬいぐるみが出来上がった。ウーたんの生みの親がミュージアムショップ担当であったことも、オリジナル商品開発の追い風になった。

ウーたん関連商品はキーホルダー、メモ帳、鉛筆、消しゴムなど20種類近くまで増え、ウーたんの存在が定着するにつれ、関連グッズの売り上げは昨年1年間で1万5,000個に迫り、ミュージアムショップ全体の売り上げの14%を占める。新商品の開発にはミュージアムショップのチーフが、スタッフにイラストを作成してもらい、話し合いながら商品デザインを完成させる。流行のグッズをいち早く取り入れるスピード感

と自由度の高さは自前のキャラクターである強みで、好循環が生まれている。細部にわたるキャラクター設定と、実在の小惑星とつながるストーリーに親近感が沸き、人気の秘訣になっている。一方で、オリジナル商品であることは発注のロットが大きく在庫を抱えるリスクもあり、2人はニーズを読むためのリサーチに力を注いでいる。

宇宙科学館が掲げる命題の一つに、地域連携がある。その実践にウーたんを前面に立て、地域でのイベントにも積極的にかかる。西九州新幹線の乗り換え駅となる武雄温泉駅は新幹線開業3年目を迎え、武雄市内への観光客の呼び込みに力を入れる。昨年4月、初めて駅前で開かれた「学びの武雄ミニ博」では、ワークショップ出店と合わせ、ウーたんが出演。合唱やマジックショーなどのステージのわきで踊り、イベントを盛り上げた。

また、武雄温泉駅と長崎駅を結ぶJR九州の観光列車「ふたつ星4047」はホームでの地元の人たちのおもてなしや特産品販売が売りの一つ。昨年9月には武雄温泉駅の出発の際、園児らに交じてウーたんもお見送りに参加。乗客の求めに応じてポーズを取るなど、武雄温泉駅でご当地キャラとしての役割も果たしている。



目を引く広報素材としてもあらゆる活用を試みる。「ミュージアムキャラクターアワード」を機に、宇宙科学館の広報の一員としてのウーたんの周知を図るために名刺カードを制作。印刷物には必ずイラストを入れ、YouTubeをはじめSNSにもウーたんを登場させている。リニューアルした宇宙科学館公式ホームページには「ウーたんの部屋」を設け、プロフィールをはじめ、活動の様子を紹介する。広報の担当者はかわいさを際立たせるポーズの研究に余念がなく、テーマソングに合わせて踊るウーたんダンスを考案中。子どもからお年寄りまで幅広い年齢層で覚えやすく、体全体を使った動



きで運動不足解消にもなるコンセプトで、動画で動きをチェックしながら、振り付けの完成を目指す。

宇宙科学館のマスコットキャラクターとしてウーたんの認知度が上がり、人気キャラクターとしての地位を固めつつあることで、地域イベントにもお声が掛かるようになった。地

域にも集客のための役割を期待されている。ウーたんに癒され、スタッフまでもが笑顔になる。愛される宇宙科学館を象徴するキャラクターに育てられるよう、スタッフ一丸となって笑顔になる取り組みを続けていく。

岩手県立博物館の ミュージアムキャラクターについて

岩手県立博物館 望月 貴史
元岩手県立博物館 田村 優子

1. モッチャン・リュウくん

岩手県は日本で最初に恐竜の骨の化石が報告された県として知られています。

1978年に岩手県岩泉町茂師海岸の崖に露出する中生代前期白亜紀の地層（宮古層群田野畑層）から見つかった長さ60cmほどの骨の化石は、研究の結果、今から約1億1000万年前に生息していた全長20mを超える大型の竜脚形類恐竜の上腕骨であることがわかりました。この恐竜は、発見された場所にちなんで「モシリユウ」と名付けられました。恐竜が生きていた時代には大部分が海の底であったと考えられていた日本からは、陸上で生活していた恐竜の化石は見つからないというのが当時の通説でした。しかし、モシリユウが見つかったことで、日本からも恐竜の化石が見つかることがわかり、その後日本各地で恐竜の化石が発見されていくこととなります。

モシリユウの化石の実物標本は、国立科学博物館に収蔵されており、岩手県立博物館ではそのレプリカを展示しています。モシリユウに近い姿をしていたと考えられるマメンキサウルスの全身骨格と並んで、モシリユウの上腕骨は当館のシンボル展示のひとつとしてエントランス近くに展示されており、訪れた人々を出迎えています。このモシリユウにちなんで生み出されたミュージアムキャラクターが「モッチャン・リュウくん」です。

このふたりは、もともとは2009年に当館で実施した事業「第2回博物館まつり」のTシャツデザインとして誕生しました。当時、事業担当の学芸員から、学生時代に絵画を学んでいた解説員の田村に、当館を代表する展示物である「モシリユウ」の「モッチャン」を描いてほしいという依頼がありました。初期のデザインでは、恐竜らしさを残したものなど、様々なスケッチを用意しましたが、「博物館の堅いイメージを払拭し、博物館をもっと身近に感じてほしい」という思いと、当時の世のゆるキャラブームも後押しし、最終的にまるみを帯びたデザインの「モッチャン」が誕生しました。翌年の第3回博物館まつりにおいてもモッチャンは広報物に使われることとなったため、モッチャンのお兄ちゃんという設定で「リュウくん」が生まれました。

好奇心旺盛で天真爛漫なモッチャンと、がんばり屋でしっかり者のリュウくんはとても仲の良い兄妹で、見た目はそっくりなのですが、まゆげがキリッとしているのがリュウくん、丸く優しいまゆげをしているのがモッチャンです（図1）。

こうして生まれたモッチャンとリュウくんは、その後の博物館まつりでも少しずつバリエーションを増やし、現在では博物館まつり以外の事業や展示においても活躍しています。

例えば、当館の主に小学生を対象とした事業のひとつに

「チャレンジ!はくぶつかん」と呼ばれるものがあります。これは毎月テーマを決め、そのテーマに沿った展示物の近くに設置された「チャレンジマーク」を、学芸員が作成したワークシートを手がかりに探しながら館内をまわるといふものです。ワークシートには展示物の写真に加え、展示物がある場所や解説が

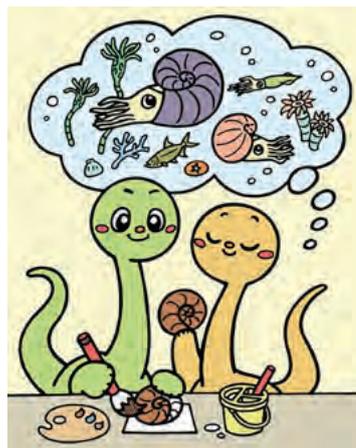


図1. モッチャン・リュウくん

添えられています。モッチャンとリュウくんはその案内役や解説役として活躍しています。堅くなりがちな学芸員の解説も、このふたりがすることで目線を子どもに合わせやすくなり、親しみやすいものになる効果が期待されます。

また、当館では来館記念スタンプが設置されていますが、モッチャンとリュウくんは記念スタンプのデザインやスタンプ用紙にも起用されています。週末になると、来館した子どもたちが楽しそうにスタンプを押している姿をよく目にします。

それ以外にも、当館解説員が毎月作成している館内の展示資料のひとつにスポットを当て、資料について掘り下げて説明をする「けんぱくものしりシート」や、各種イベントのチラシ、館内の装飾など様々な場所でこのふたりを見ることができます。

モッチャンが生まれて15年以上になりますが、現在に至るまで館職員から来館者まで多くの方に愛されているキャラクターとなっています。

2. 『マエサワクジラ』

モッチャン・リュウくん比べると、比較的近年になって岩手県立博物館のミュージアムキャラクターとして加わったのが『マエサワクジラ』です。（以下、紛らわしいため、ミュージアムキャラクターを『マエサワクジラ』、モチーフとなった化石標本をマエサワクジラとして表記します。）

マエサワクジラは、1981年に岩手県前沢町生母（現、奥州市前沢生母）に分布する新生代第三紀鮮新世の地層（竜の口層）から見つかった、今から約500万年前の海に生息していたヒゲクジラ類の化石です。ほぼ全身に近い骨格が見つかっており、世界的にも貴重な標本のひとつです。現在のクジラの中ではミンククジラに近い種類と考えられていますが、

正式な学名はまだついておらず、発見された地名を取ってマエサワクジラという和名が与えられています。

マエサワクジラの原標本は岩手県立博物館に収蔵されており、当館1階の自然史展示室には発掘当時の産状を再現した標本と、全身骨格のレプリカが展示されています。

『マエサワクジラ』が当館のミュージアムキャラクターとなったのは、2019年のことです。

2018年の8月、クジラをモチーフとした創作活動を行っているイラストレーターのあらたひとむ氏から、当館に一本のメールが届きました。あらた氏はそれまでも2010年に国立科学博物館で開催された「大哺乳類展～海の仲間たち～」における公式キャラクターの制作をはじめ、クジラを題材にした作品を多数手がけており、この時にはインターネットで当館のクジラ化石の記事を見たことがきっかけでご連絡をいただきました。その中で、あらた氏の作品に「ご当地クジラキャラクター」と名付けられた各都道府県をイメージしたクジラ作品のシリーズがあり、岩手県のクジラ化石をモチーフにしたキャラクターを作らせてもらえないかというご相談がありました。

その後、館内で検討をしたところ、非常に興味深い企画であったため、企画に協力しキャラクターを作っていたこととなりました。制作に際しては、長年岩手県内外のクジラ化石の研究をされてきた元岩手県立博物館学芸部長の大石雅之氏に、どのクジラ化石が良いかということ相談したところ、岩手県を象徴するものであればマエサワクジラが良いのではないかとアドバイスをいただき、マエサワクジラをモチーフにしたキャラクターを制作していただくこととしました。

デザインにあたってはあらた氏とメールで打合せを行い、マエサワクジラがミンククジラに近い種類であるということと、発見された場所が奥州市であるということから、奥州藤原氏をイメージするような見た目が良いのではないかとことになりました。そのため、『マエサワクジラ』はミンククジラをデフォルメした見た目に平安時代を想起させるような烏帽子を被った姿となっています。また、奥州市の名産品である奥州短角牛と、馬に乗った武士のイメージとを重ね合わせ、ロッキングホースならぬロッキングカウに乗ったデザインが完成しました(図2)。『マエサワクジラ』のデザインにはいくつかの種類があり、烏帽子を脱ぐとプロウ(潮吹き)風のちょんまげが備わっています。

このようにして制作された『マエサワクジラ』は、翌2019年に当館のミュージアムキャラクターとしてデビューしました。あらた氏から当館の来館記念スタンプやその他の販促ア

イテムに使用することについてご承諾をいただいていたことから、最初はモッチャン・リュウくん同様に、館内の装飾や来館記念スタンプとしての活用から始まりました。

それから2年後の2021年、当館でオリジナルのミュージアムグッズを作りたいという話が持ち上がり、そのモチーフとして『マエサワクジラ』を起用できないかという意見が出ました。その後、ミュージアムグッズとし

ての『マエサワクジラ』の使用についてあらた氏に改めてご相談したところ、ご快諾をいただいたため、商品化の話が進められていきました。その結果、『マエサワクジラ』をモチーフに取り入れたエコバックやクリアファイル、メモ帳、フェイスタオル等の商品が作られ、ミュージアムショップで取り扱うこととなりました(図3)。



図2. マエサワクジラ

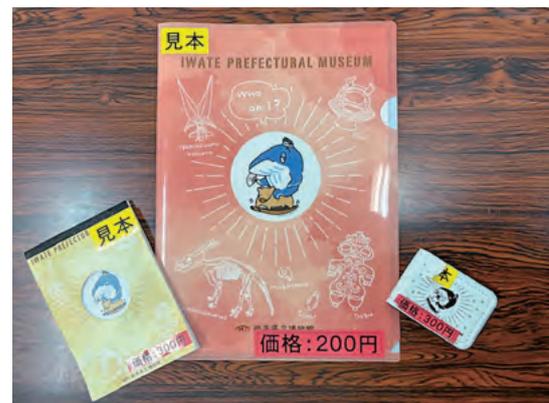


図3. マエサワクジラのミュージアムグッズ展開例

モシリウなどの恐竜の化石と比較すると、クジラの化石は知名度としては少し低いように思われがちですが、『マエサワクジラ』は誰にも親しみやすいキャラクターデザインに加え、ミュージアムグッズへの起用によって、貴重な化石が岩手県から見つかっていることを大人から子どもまで幅広い年代に知ってもらえるきっかけになったのではないかと考えています。

軌道星隊シゴセンジャー

明石市立天文学館
井上 毅

本号の特集は「ミュージアムキャラクターのすゝめ」とのことで、編集部より明石市立天文学館のシゴセンジャーのことを紹介してほしいという依頼を受けました。こうした特集を計画されることをとても面白く思いながら、依頼があったことをとても光栄に思っています。シゴセンジャーは、今年でデビュー20年を迎えます。「やってきて、よかったなあ」

と思うことが多くあります。本稿ではシゴセンジャーの活動をQA方式で紹介しましょう。

1 シゴセンジャーとは?

読者の中には「シゴセンジャーってなに?」と思った方もいらっしゃるでしょう。シゴセンジャーは明石市立天文学

館に登場するヒーローです。当館は、東経135度日本標準時子午線上に建つ「時と宇宙の博物館」です。子午線という言葉、子どもたちにはちょっと難しい響きです。シゴセンジャーは子午線という言葉に親しみをもちってもらうために誕生しました。主にプラネタリウムに登場し、悪役と天文クイズで楽しく戦います。「ああ、そういうこと！」と納得いただけましたか。

この「シゴセンジャーってなに？→なるほど！」というやり取りは、これまで数えきれないくらいありました。紹介するだけで話が膨らみます。シゴセンジャーの大きな魅力です。



2 だれがやっているの？

いきなり核心をつくデリケートな質問ですね。クリスマスになると大人たちがいつも苦労する質問に似ています。サンタクロース、答えに散々苦労する、という感じです。子どもたちには絶対内緒にしてください。当館の学芸員や指導主事に変身しています。これはレベル135の機密事項です。

3 シゴセンジャーが誕生したきっかけは何ですか？

発案したのは私（井上毅）です。昔、能登半島の旧柳田村・満天星天文台を訪問した時、学芸員の室石英明さんが、まんてん仮面に変身していたように感じました。まんてん仮面は、ケーブルテレビでとてもゆるく天文知識を説明していました。絶妙な雰囲気がとても楽しい素晴らしい企画でした。



満天星天文台のまんてん仮面

その後、館内でお母さんが小さな子どもに、「●●ちゃん、ここにコウシセンがおっているのよ」と説明するようすに出会いました。子午線を誤読して「子牛線」と読んでいたのです。これはいけないなあ、ちょっと難しい印象のある子

午線、親しんでもらうにはどうすればいいだろう？ そうだ、ヒーロー「シゴセンジャー」が登場すれば！というかんじでシゴセンジャーのアイデアが出てきました。アイデアを形に仕上げたのは、同僚の学芸員の鈴木康史です。私がシゴセンジャーのアイデアを持ちかけると鈴木は快諾し、パーティ用覆面ヒーローグッズに段ボールで作ったプロテクターを組み合わせて、なかなか見事なコスチュームを作りました。鈴木がヒーローの「シゴセンジャーレッド」、私が悪役「ブラック星博士（ほしはかせ）」を演じ、プラネタリウムでクイズ対決をすることになりました。その後人事異動でやってきた指導主事をブルーとして巻き込み、枠組みは完成。2005年の大型連休のイベントで初登場しました。

4 お客様の反応はどうでしたか？

プラネタリウムで鈴木が解説、20分ほど経過し解説が興に乗ってきたところに、ブラック星博士が乱入しました。「わはははは！ブラック星博士じゃあ！」お客さんは、本気でびっくりしたようです。プラネタリウムのキャラクターといえば、スライドかアニメが映し出されるのが普通です。そこにリアルに悪役（ほぼ不審者）が乱入したのですから。シーンと静まり返るプラネタリウム。畳みかけるようにダジャレ「木星はくさい、もーくせい」場内シーン！笑いを取りに行ったはずなのに、完全に滑った！戸惑う観客。泣き出す子ども。そこに登場するシゴセンジャー。「この空気をどうしてくれるのだ！みんなでこの悪者をクイズで倒そう！」ほっとする子ども。クイズ大盛り上がり。体当たりのデビューは、観客にとっても強い印象を残したようです。

5 デビュー後どうなりましたか？

せっかく用意したコスチュームがもったいないので、第二弾、第三弾とやっているうちに、次回を心待ちにする子どもたちが（大きなお友達も）増えてきました。やがてテーマソングができ、新聞やTVなどに紹介され、認知度が向上しました。寒いダジャレのブラック星博士にもコアなファンが付くように、「ダジャレは受けなくてよい、あとはシゴセンジャーが倒してくれる」という気楽さが良かったのでしょうか。肩の力を抜いて気軽にやってくるうちにブラック星博士のダジャレも受けるようになってきました。学芸員としての高度な専門性や教育普及のまじめな要素とのギャップも面白かったようです。

6 シゴセンジャーの活躍の場の例は？

天文教育界隈でシゴセンジャーの噂が広がりました。仲間たちは新しい取り組みに寛容でした。プラネタリウムの大会に呼ばれたり、全国科学博物館協議会の研究発表にも登壇しました。世界天文年2009という天文学の大きなイベントにも登場しました。シゴセンジャーとブラック星博士のやり取りに、最前列の大先生が満面の笑顔になり、「盛り上げてくれてありがとう！」会場がどっと沸いたのは懐かしい思い出です。ダジャレが大好きな大先生でした。天文学を中心に学術の世界でも広く知られる存在となっていきました。シゴセンジャーの天文普及の功績により、国際天文学連合により小惑星のひとつが「Shigosenger（シゴセンジャー）」と命名されました。

明石市立天文科学館は2023年に日本博物館協会賞を受賞し

ましたが、シゴセンジャーの取り組みを評価いただいたのは嬉しいことでした。国際的な博物館を紹介するTHE BEST IN HERITAGE 2024では日本の博物館を代表して、オンラインインタビューを受けました。インタビューで、「you have created a famous character called Shigosenger to help engage children. How has that worked for you?」と聞かれ、感動しました。



小惑星シゴセンジャー命名記念式典(発見者 関勉さんと一緒に記念撮影)

シゴセンジャーは、地域でも愛されています。市の広報や市主催のイベントに度々登場したり、小学生のランドセルのカバーに描かれたり、一日警察署長になったり、新幹線駅で見かけたり、などミュージアムのキャラクターを超えた活躍の場を与えてもらっています。

7 シゴセンジャーにはどんなキャラクターが登場しますか?

新たな展開を模索するなかで、レッド、ブルー以外にピンク、イエロー、グリーン、ブラック星博士の子分も登場し、公募ボランティアがその任務にあたりました。当館が変形したロボット「シゴセンオー」、さらに悪役ロボット「ジャンボブラック星博士ロボβ」やロボットを作った天才科学者「ブラックほしむすめ」も出現しました。これらは兵庫県出身のプロのCGクリエイター岡本さんが趣味で作ったもの。見事なクオリティで感謝するばかり。ブラックほしむすめは、イラストレーター八王子さん原案のデザインを岡本さんがCG化したものです。これらのミュージアムグッズもいろいろ製作されています。多くの関係者やファンに支えられシゴセンジャーワールドは広がっています。



8 ブラック星博士の活動は?

ブラック星博士も活躍の場が広がっています。名古屋のZIP-FMの朝の番組では、「井上さんの天文情報+ブラック星博士のダジャレ」というスタイルで10年ほどレギュラー出演しました。天文雑誌「星ナビ」では連載をもち、面白い天文ネタを紹介しています。また、全国各地のプラネタリウムでブラック星博士のイベントが行われています。私(井上)はマネージャーという役割でブラック星博士と同行しています。北海道から沖縄まで、ブラック星博士のおかげで全国を訪問させてもらっています。2024年夏にドイツで国際プラネタリウム協会のカンファレンスがあった際には、米国のプラネタリウム関係者にブラック星博士のファンがいてびっくりしました。ブラック星博士のファンの方々には本当に感謝しています。

9 さいごにひとこと

シゴセンジャーが地球に登場して20年。ありがたいことに、人気は高まる一方で、イベントはいつも満員御礼状態です。幼少期にシゴセンジャーを見た人が、子どもを連れてやってくるような時代になってきました。シゴセンジャーの活躍とともに我々のスキルもずいぶん上がったように思います。ブラック星博士のマネージャー(井上)は、館長に、レッドのマネージャー(鈴木)は副館長に、歴代のブルーも校長先生になったりしていますが、まだまだ元気にやれそうです。当館の若いメンバーも自由な発想で新しい企画に取り組む雰囲気を感じます。今後のチャレンジがたのしみです。

拙稿をお読みになり、やってみたいなーと思ったあなた。勇気をもって一歩を踏み出してみてください。ミュージアム・キャラクターは、あなたと館の潜在力を引き出してくれますよ!

参考

シゴセンジャー プロモーション映像

<https://youtu.be/FCQAvuVZLDw?si=BMrYUkh8njzDKFdO>

全国科学博物館協議会 第17回研究発表大会(平成21年度)

軌道星隊シゴセンジャーの活躍と連携について

明石市立天文科学館 井上毅

https://jcs.jp/.wps/wp-content/uploads/presentation/case17_6.pdf



■ 企画展・特別展

ポーランドのグダニスク国立海事博物館で、グダニスク造船所の写真展を開催

2024年5月24日に、ポーランド北部の造船の町グダニスク（都市圏人口：108万人）にある、グダニスク国立海事博物館で、グダニスク造船所を写した写真展「海の巨人をつくる（ムルタニャク・テルツヤン写真展）」が開催した。

同展は、ポーランドがまだ共産主義国家だった1950年代と、1960年代のグダニスク造船所（ナチス・ドイツの占領期だった1945年に設立）の操業風景とそこに働く人々の様子を写した作品で構成されたものだ。写真を写したムルタニャク・テルツヤン（1921-1981）は、独学で写真を学び、1960年にグダニスク造船所に、造船の作業工程をカメラで撮る専属のカメラマンとして採用されてから、定年まで勤めあげた。定年退職後もグダニスクで亡くなるまで、グダニスク造船所を撮り続けた。担当学芸員：造船史研究室（Jakub Adamczak, Aleksandra Kucharska, Anna Polańska, Hanna Borkowska, Paweł Józwiak, Jan Tymiński, Marcin Westphal, Barbara Wojczuk-Krystek）。

60点からなる「海の巨人をつくる」展は、グダニスク国立海事博物館（1962年開館）がグダニスク港の岸壁で保存船として保存管理している、貨物船「ソーディック」で開催。1948年3月にグダニスク造船所で進水した鉱石・石炭運搬船「ソーディック」（全長：87メートル、載貨重量：2,560トン）は、第2次世界大戦下のリトアニアでユダヤ難民6,000人の命を救った外交官・杉原千畝を描いた邦画「杉原千畝 スギハラチウネ」（チェリン・グラック監督、2015年製作）で、杉原が発給した日本通過のビザを手にしたユダヤ難民を、ウラジオストックから敦賀まで運んだ「天草丸」（1901年独ロストックのネフタン造船所で貨客船「アムール」として進水）として登場した。会期：2025年10月31日まで。

Budując morskie kolosy. Fotografie Tercjana Multaniak. Narodowe Muzeum Morskie w Gdańsku, Gdańsk.
<https://nmm.pl/en/2024/07/16/building-maritime-giants-photographs-by-tercjana-multaniak/>
<https://www.portalmorski.pl/inne/55758-budujac-morskie-kolosy-fotografie-tercjana-multaniaka-niezwykla-wystawa-na-soldku>
<https://kwartalnikfotografia.pl/budujac-morskie-kolosy/>
<https://nmm.pl/en/soldek/>

英パース博物館で、洪水展を開催

2024年11月8日に、イギリスはスコットランド地方のパース（都市圏人口：214万人）にある、パース市立博物館で、地元パース周辺と海外で起こった洪水をテーマとした企画展が開催した。

「ウォーターズ・ライジング（Waters Rising）」展は、聖書の記述から古代エジプト、北アメリカ、そしてより身近な最近の洪水まで、パースがあるスコットランド地方と海外の洪水に関連する、パース市立博物館や海外の博物館収蔵品で構成されている。世界的な気候変動の緊急事態の脅威の高まりを探りながら、洪水や異常気象が、パースと隣接するキンロスのコミュニティ、企業、インフラに与える影響を検証している。また、公募で得られた、多くの地元の人々の写真や手紙などの個人的な思い出も含まれている。担当学芸員：Niamh Finlay。

現在の博物館は、1914年に建設された旧パース市庁舎に、総事業費2700万英ポンドをかけて、リニューアル・オープンした歴史博物館。前身は、「パース博物館・美術館（Perth Museum and Art Gallery）」で、起源は1784年に設立された「古物収集家協会」。会期：2025年3月16日まで。

Waters Rising.

Perth Museum. Perth, Scotland.

<https://perthmuseum.co.uk/inside-the-museum/watersrising/>

<https://www.dailyrecord.co.uk/news/local-news/visitors-can-choose-what-pay-34062233>

英ウェストン公園博物館で、リワイルディング展を開催

2023年4月22日に、英中部の工業都市シェフィールド（都市圏人口：76万人）にある、ウェストン公園博物館で、「過去の自然と、将来のリワイルディング」展が開催した。同展は、イギリスにおける過去の自然の形成と減少、そして将来におけるリワイルディング（rewilding）の可能性を探求したものだ。担当学芸員：Alistair McLean。

リワイルディングの概念は、気候変動と種の絶滅に対する解決策として20年前に初めて提案されたもので、絶滅の危機に瀕している動植物種を元の生息地に戻し、生物多様性を高めるために、自然のプロセスを解放することを意味している。訳語として、「原生自然再生」、「再自然化」「再野生化」などがある。リワイルディングは、欧米を中心として近年急速に具現化され始めているエコロジー運動のひとつだ。それは、これまでの自然保護運動や、国立自然公園・世界自然遺産などの認定や運営に

において重視されてきた「手つかずの自然」、野生・野性、原生・原始、在来種と外来種の区別、自然美あるいは美的自然などの概念に鋭く再考を迫るプロセスでもある。

ウェストン公園博物館で開催中の「過去の自然と、将来のリワイルディング」展では、将来のリワイルディングを次のように紹介している。「リワイルディングとは、ある地域をより自然な状態に復元するプロセスです。自然の成り行きに任せると表現されることもあります。実際には、自然のプロセスを利用して野生生物のために土地を管理することです。これにより、生息地がより安定し、持続可能な方法で生物多様性が高まります。将来、すべての自然保護区はこのように管理されるようになることを考える生態学者もいます」。そして、この考えにもとづいて、過去の自然を次のように紹介し、かつ同展の観覧者に対して問題提起をしている。「多くのリワイルディング・プロジェクトには、在来種の再導入が含まれています。在来種とは、約1万年前の最後の氷河期の終わり以降に、人間の干渉を受けずに英国に到着した種であるという点では、ほとんどの生態学者が同意しています。展示で紹介しました化石標本は、かつて英国に生息していた種を示します。一部の種は、もうここにはいませんが、依然として英国諸島の在来種と見なされる場合があります。再導入できるのでしょうか？あるいは再導入すべきでしょうか?」。会期：2025年8月31日まで。

Nature of the Past, Rewilding the Future.

Weston Park Museum. Sheffield, South Yorkshire.

<https://www.sheffieldmuseums.org.uk/whats-on/nature-of-the-past-rewilding-the-future-1/>

<https://abitblackoverbillsmothers.substack.com/p/sunday-at-bills-mothers-21st-may>

<https://iucn.org/our-union/commissions/group/iucn-cem-rewilding-thematic-group>

<https://tenbou.nies.go.jp/news/fnews/detail.php?i=4639>

<https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/5234.html>

<https://www.shinrinbunka.com/wgp/focus/29004.html>

加レッドブリック・アートセンターで、山火事展を開催

2024年9月2日に、アルバータ州中部のエドソン（都市圏人口：8,300人）にある、レッドブリック・アートセンターで、アート展「山火事」が開催した。同展は、森林火災が多いカナダで、山火事の拡大のパターン、破壊力と将来への不確実性をテーマにしたアート作品展であり、出品したアーティストは地元だけでなく、広くカナダ全土で活躍しているアーティストが参加している。学芸担当：Lara Felsing。アルバータ州の58%（7,800ha）は豊かな森林に覆われ、高頻度かつ大規模に森林火災が起き、また火災も多い大規模な森林火災も多いことが知られている。会期：2024年9月30日まで。

Wildfire-an Exhibit Exploring Patterns, Devastation &

Uncertainty in the Time of Fire.

Red Brick Arts Centre. Edson, Alberta.

<https://culturedays.ca/en/events/6e326e1b-4b92-4d34-91b1-c2aecffaa571>

<https://www.gallerieswest.ca/events/wildfire/>

<https://www.larafelsing.com/cv-2/>

<https://www.hro.or.jp/upload/7691/dayori0711.pdf>

米サンディエゴ現代美術館で、「アートに描かれた医学と障がい」展を開催

2024年9月19日に、カリフォルニア州サンディエゴ（都市圏人口：327万人）にある、サンディエゴ現代美術館で、アート展「愛しい生命：アート・医学・障がい」が開催した。同展では、1960年代からコロナウィルスの大感染拡大期までの、アメリカ美術における病気と障害のテーマにしたアート展である。同展では、過去数十年間の激動と変革の中で、人間の脆弱な身体が、アメリカの芸術にとって重要なテーマであることを認識しながら、障がいというレンズを通して近年の芸術の歴史を追っている。アメリカで活躍中の85人のアーティストの作品が出品されている。いづれも、何かしらの病気や障がいを抱えながら、創作活動に取り組んでいる。担当学芸員：Jill DawseyとIsabel Casso。会期：2025年2月2日まで。

For Dear Life: Art, Medicine, and Disability.

Museum of Contemporary Art San Diego. La Jolla, California.

<https://mcase.org/exhibitions/for-dear-life-art-medicine-and-disability>

米ハンチントン博物館で、気候変動展を開催

2024年9月14日に、カリフォルニア州のサンマリノ（ロサンゼルス都市圏人口：1,300万人）にある、ハンチントン博物館で、「嵐雲：現在の気候変動の起源を描く」展が開催した。同展は、科学者をはじめ、芸術家、作家によって記録された、1780年から1930年までの産業化とグローバル化した経済が日常生活に与えた影響を分析し、この歴史的枠組みの中で現在の気候危機を文脈化している。この150年は、英語圏で急速な工業化が進んだ時代であり、地質学、古生物学、気象学、生態学の科学が発展した時代でもあった19世紀における環境意識の高まりも紹介されている。出品作品は、ハンチントン博物館のコレクションから選ばれた約200点の所蔵品と、米国および英国の博物館から借り受けた作品で構成されている。担当学芸員：Melinda McCurdyとKarla Nielsen。会期：2025年1月6日まで。

Storm Cloud: Picturing the Origins of Our Climate Crisis. The Huntington Library, Art Museum, and Botanical Gardens. San Marino, California.

<https://huntington.org/exhibition/storm-cloud-picturing-origins-our-climate-crisis>

List of special
exhibition!

3月4月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	春休みイベント2025	3月25日～4月7日
岩手県立博物館	テーマ展「驚異の部屋～博物館の珍品・お宝大集合」	3月29日～5月18日
牛の博物館	郷土の企画展「森田純版画作品展」	1月25日～3月20日
秋田県立博物館	「秋田の宝 -県指定文化財展-	2月15日～4月6日
ふくしま森の科学体験センター	きも?かわ?生きもの展	3月1日～4月6日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「星の進化をたどる」	2月1日～4月20日
	スペースパーク企画展「ロボットフェスティバル」	3月22日～3月23日
	ホワイエ企画展「ふくしま星・月の風景写真展」	4月26日～6月29日
つくばエキスポセンター	企画展「またまた帰ってきました! トリックアート展～錯視の謎解き～」	3月15日～5月11日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「GSJのピカイチ研究」	3月4日～4月20日
	特別展「地質とAI～地球を読み解く新たなアプローチ～」	4月22日～9月7日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	ミュージアムパーク30年のありつたけ -いつも茨城県自然博物館は面白い!-	2024年11月2日～6月1日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「星の衝突で、何ができた? -月のうさぎと私たちの地球-」	2月1日～3月30日
	KAGAYA 星空写真展	2月8日～4月6日
栃木県立博物館	テーマ展「へびなんて、キライ!」	2024年10月5日～3月2日
	テーマ展「昔のこと知ってっけ?～道具を知れば暮らしが見える～」	2024年11月23日～3月30日
	テーマ展「藤原秀郷とその末裔たち～語り継がれる史実と伝説～」	2月22日～3月30日
	テーマ展「地層の剥ぎ取り標本って、おもしろい!」	3月15日～6月15日
	(予定) 企画展「外来生物～人によって運ばれた生き物たちからのメッセージ～」	4月26日～6月15日
群馬県立自然史博物館	第71回企画展「ツツジとその仲間たち～華麗にして奇妙な一族の話～」	3月15日～5月18日
千葉県立中央博物館	房総のミニチュア「生態園」～日本初エコロジー・パークの35年～	2月22日～5月6日
国立科学博物館	企画展「貝類展：人はなぜ貝に魅せられるのか」	2024年11月26日～3月2日
	特別展「古代DNA -日本人のきた道-」	3月15日～6月15日
	気象業務150周年企画展「地球を測る」	3月25日～6月15日
たばこと塩の博物館	日常をつくる! 企業博物館からみた昭和30年代	1月18日～3月23日
	浮世絵でめぐる隅田川の名所	4月26日～6月22日
多摩六都科学館	春の企画展 カラーのヒミツ	3月22日～4月6日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	企画展「すな-ふしぎをみつけよう-」	2月22日～5月11日
新江ノ島水族館	えのすいの深海展 -ディープ度200%-	2024年12月28日～4月6日
平塚市博物館	みんなで調べよう「平塚のカマキリ」結果報告!	2月7日～4月6日
	春期特別展「近代ひらつかの女性たち」	3月22日～5月18日
上越科学館	ひよこの誕生	3月25日～4月6日
岐阜県博物館	企画展「雑草とよばないで」	3月18日～6月15日
岐阜かかみがはら 航空宇宙博物館	月への挑戦 -アポロ計画から50年、人類は再び月を目指す-	2024年10月12日～3月9日
	ドラえもん科学ワールド 空を飛ぶしくみ	2024年12月7日～4月7日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	全地球史展	2024年12月14日～3月23日
	蝶聖・高橋真弓氏を偲んで -富士川から日本列島へ、そして世界へ-	4月15日～8月3日
	標本サファリ -大地の動物・水の動物-	4月15日～8月3日
ディスカバリーパーク焼津 天文学館	春の特別展「宝探し さがせ! 海賊船の宝」	4月19日～6月29日
碧南海浜水族館	ドラゴンズベビー来館20周年(仮称)	4月12日～6月29日
名古屋市科学館	特別展「鳥～ゲノム解析が解き明かす新しい鳥類の系統～」	3月15日～6月15日
京都鉄道博物館	『シンカリオン チェンジ ザ ワールド』in 京都鉄道博物館	2024年12月21日～3月2日
大阪市立科学館	企画展「万博で夢見たサイエンス展」②	2月5日～4月6日
	企画展「プラネタリウム100年 -プラネタリウムの過去・現在・未来-	4月22日～6月29日
高槻市立自然博物館 (あくあびあ芥川)	企画展『「私の水辺」北部地域交流会水辺活動展示会』	2月1日～3月2日
	企画展「みじかな自然の色さがし -生きものたちの色-	3月8日～6月22日
伊丹市昆虫館	企画展「伊丹の自然」	2月26日～5月12日
明石市立天文科学館	KAGAYA 作品展	2月1日～4月6日
島根県立三瓶自然館	はためく生きもの ～国旗に描かれた動植物～	3月15日～5月25日
出雲科学館	生活の中のふしぎ展	3月15日～4月13日
人と科学の未来館サイピア (岡山県生涯学習センター)	春季企画展「亀崎 亀展」	3月1日～4月20日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「畠田和一貝類コレクション展 11 畠田和一が採集していた岡山県の絶滅危惧種7」	2024年10月12日～3月23日
	特別陳列「みんなの動物ラボ」	2月4日～3月22日
笠岡市立カプトガニ博物館	特別陳列 「八百万のカプトガニ」展	2月1日～4月6日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	上手に眠ろう!～素敵な睡眠のおはなし～	3月15日～7月6日
広島市江波山気象館	企画展「ボールでチャレンジ! 科学あそび広場」	1月25日～3月16日
広島市交通科学館	春季企画展「時代を駆けるミニ四駆」	3月7日～5月6日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	第52回企画展「コロっと夢中! 鉱石鉄道～キラ石の銀河を見つけよう～」	3月15日～4月6日
香川県立五色台 少年自然センター	香川の野鳥	3月8日～3月29日
愛媛県総合科学博物館	企画展「宇宙で食べる・宇宙で生きる」	2月22日～4月6日
佐川地質館	特別展「洞窟に落ちた動物たち」	2024年5月18日～5月6日
北九州市科学館 (スペースLABO)	新世界 透明標本展	3月15日～5月18日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「調べる・くらべる、地域とくらしと道具のうつりかわり」	2024年11月30日～3月23日
	春の特別展「絵本でたどるいのちのふしぎ かこさとし×いのちのたび博物館」	3月15日～5月6日
福岡市科学館	特別展「絵本とあそぼう はじめての? (はてな)」	3月21日～5月6日
福岡県青少年科学館	スペースパーク～宇宙を感じるワク☆ドキ! 体験～	3月1日～4月6日
佐賀県立宇宙科学館	ゆめぎんが・プチミュージアム「佐賀の貝化石」	1月21日～4月6日
	《ゆめぎんが》春の企画展2025「ピーコロ®×おもちゃ展」	3月15日～5月6日
御船町恐竜博物館	令和7年御船町恐竜博物館春期特別展「よみがえる日本の恐竜たち」	3月8日～5月11日
熊本県博物館 ネットワークセンター	動物調査のいろは	3月25日～6月15日
宮崎県総合博物館	第45回 SSP 展 自然を楽しむ科学の目	4月26日～6月8日

※次号(5月号)に掲載の5月6月の特別展情報は3月14日(金)までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号(5月号)に掲載のリニューアル情報は3月10日(月)までにお寄せください。

香川県立五色台少年自然センター 自然科学展示室

[更新箇所] 香川県立五色台少年自然センター 自然科学展示室

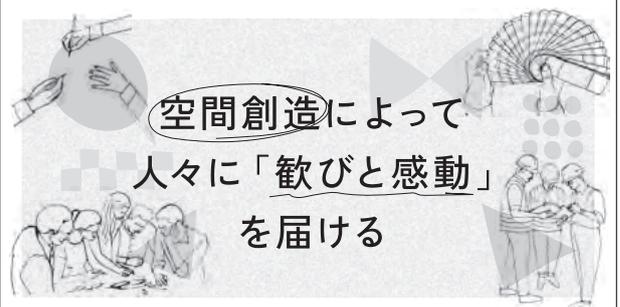
[更新内容] 香川県立五色台少年自然センターの自然科学展示室では、県内で産出する岩石や化石、生物のはく製などの自然科学にまつわる資料を多数展示しています。

今回は、見ている人がわかりやすく、また、幅広い年代の方が楽しみながら香川県のことを深く理解できるように大幅リニューアルしました。香川県や瀬戸内海の大地の成り立ち、地形や瀬戸内海式気候に適応した動植物、そしてそれらを活用してきた人々の暮らしを結び付けられるような展示内容になりました。疑問→仮説→実験→考察→新たな疑問という「探究の過程」を大切にした展示にすることで、見ている人が香川県について進んで考察したくなるような工夫を行っています。また、サンショウウオやタガメなどの生体展示を行ったり、アニメーションなどの視聴覚教材を導入したりしています。その他敷地内には、四国最大級の大型望遠鏡も併設されています。自然科学、人文科学に関して幅広く資料をそろえています。ぜひ、ご来館ください。

[公開日] 2025年4月1日



Panasonic
CONNECT



株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)

(仮称)東近江市 森の文化博物館
(東近江市企画部政策推進課森の文化博物館整備室)

〒527-8527

滋賀県東近江市八日市緑町10番5号

https://www.city.higashiomi.shiga.jp/bunka_sports_shougaigakushu/morinobunka/1008278.html



自然と人の営みが織りなす山村景観

滋賀県東近江市は、東端を三重県の県境に接し、鈴鹿山脈から琵琶湖まで森里川湖が愛知川という一つの水系でつながり、多様な自然環境の中で奥深い歴史文化が育まれてきたまちです。本市では、愛知川の源流部である鈴鹿山脈を「鈴鹿の森」と位置付けています。鈴鹿の森は、古くから森と人が密接に関わってきたことで生物多様性に富んだ豊かな森を育んだと言われており、木地師文化や政所茶の栽培など、自然や歴史的資源が今も色濃く残る地域です。

この鈴鹿の森の様々な地域資源が存在するフィールド全体を「(仮称)森の文化博物館」と位置付け、魅力ある地域資源のつながりをいかした多彩な事業をフィールド全体で展開するとともに、森の重要性を発信し、森と人とのつながりを取り戻すことを目指します。

多様な人々が博物館活動に参加・協働することで、社会や地域の課題を共有し、課題解決に向けた活動や取組につなげるとともに、ひいては全国に共通する適正な森林管理や生物多様性の保全、ネイチャーポジティブなどに貢献することにつながります。

フィールドを活用した博物館活動はすでに始まっており、さらに森をより深く学び、森と人とのつながりを取り戻すための活動拠点の整備について、令和10年度の開館に向け、準備を進めています。

会員の皆様どうぞよろしくお願いいたします。



鈴鹿の森には、暖温帯を代表するアカガシと冷温帯を代表するブナが混成した森がある

こころを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL_03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL_03-3350-6725 FAX03-3350-6745
<http://www.tokyo-science.co.jp>
E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

ステンドグラス



大阪市立科学館公式HP
<https://www.sci-museum.jp/>

2024年の全館展示改装により、「物質の探究」をテーマとする展示場3階では結晶だけでなく非晶質の物質の展示も充実させました。中でも目を引くのが、新たに登場したステンドグラスです。カラフルな色は、ガラスに含まれる微量な元素が作り出しています。様々な伝統的手法を組み合わせで表現された「水都大阪」のモチーフを楽しみながら、美しさを生み出す化学の妙に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



次回執筆者は、バンドー神戸青少年科学館 展示普及ディレクター 有村 直子さんです。

リニューアル情報のご提供をお願いします

最近(近年)リニューアルした展示、コーナー等がありますか？

もし、リニューアル行いました!という館・園がございましたら、ぜひ全科協ニュースへ情報をご提供ください!

全科協ホームページの投稿フォームからご投稿いただけます。

もしくは、事務局(info@jcs.jp)までお問合せください。

また、併せて特別展等の情報もご提供お待ちしております。(次号は5月6月開催分になります)

皆様のご投稿お待ちしております。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)

南部 靖幸(熊本博物館学芸員)

西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
所沢航空発祥記念館主査)

平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))

弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)
天文担当係長)

望月 貴史(岩手県立博物館専門学芸員)

関根 則幸(国立科学博物館学習支援部広報・連携課長)

全科協事務局

国立科学博物館
学習支援部 広報・連携課
(担当:中山・斉藤・清水)
TEL 03-5814-9171
info@jcs.jp

発行日 2025年3月1日

発行 全国科学博物館協議会◎

〒110-8718

台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 株式会社セイコー社